ファミリー・アンド・ヒストリー

〔第46回〕

契約の箱と御神輿

文 岩本耕太郎 text by Kotaro Iwamoto

紀元前1000年頃、イスラエルの王ダビデは神の「契約の箱」をエルサレムに運び入れました。

契約の箱とは、日本の御神輿に似た移動式の神殿です。聖櫃ともアークとも呼ばれていて、映画『インディ・ジョーンズ』に登場したあのアークのことです。

「契約の箱」は長さ113㎝、幅と深さはそれぞれ68㎝ほどの長方形の箱でした。

契約の箱は2本の棒で担ぐようになっていて、聖書によれば担ぎ棒を通す環は「箱の基部に取り付けられていた」と書かれており（出エジプト記25・12）、ちょうど日本の御神輿のような形です。

日本ではいろいろなサイズの御神輿がありますが、この契約の箱のサイズとそれほどの違いはないように思われます。

御神輿にはその上部に「鳳凰」と呼ばれる金の鳥の像が付いていて、その翼を広げています。鳳凰は想像上の鳥で、天界に住んでいます。

同様にイスラエルの契約の箱の上部にもケルビムと呼ばれる天使が翼を広げていました。

契約の箱は木材で作られており、全体が金で覆われていたそうですが、日本の御神輿も檜で作られており、ところどころに金があしらわれています。

イスラエルでは祭司がこれを担ぎ、エルサレムの街中を神楽の音の鳴り響く中、練り歩きました。

ダビデ王はその前で踊ったのですが、その姿を見た王妃ミカルは「心の中で彼をさげすんだ」と聖書に記されているので、その踊りは優雅というよりはむしろ喜びを率直に表現する踊りだったのだろうといわれています。

日本で御神輿の回りで人々が踊り歩くのも案外ダビデ王の逸話と関係があるかもしれませんね。

京都の祇園祭では御神輿は鴨川の橋を越えて行きますが、全国の他の祇園神社では実際に御神輿を担いで川に入って歩いて渡って行くところが少なくありません。

これはイスラエルの民が出エジプトのあと、祭司たちが先立って契約の箱を担いでヨルダン川を渡った（ヨシュア記3章）ことを髣髴とさせます。

世界中の風俗の中でもアークと御神輿ほど似ているものは他にはないと思います。

profile
帝国クリニック院長
1959年生まれ。幼少期をボストンで過ごす。
山形大学医学部卒。米国イリノイ州立大学で分子生物学を研究、1993年より現職。
サーフィンとクラッシックカーをこよなく愛し、4世代7人家族。
著書に『患者さまが増える』(H&I出版)、『エグゼクティブが実践するたった一つの健康法』(中経出版)